松井 太 2013:「敦煌諸石窟のウイグル語題記銘文に關する箚記」
『人文社會論叢』人文科學篇30, 弘前大學人文學部, pp. 29-50.
MATSUI Dai 2013: Notes on the Old Uigur Wall Inscriptions in the Dunhuang Caves.
Studies in the Humanities (Volume of Cultural Science) 30, pp. 29-50.

敦煌諸石窟のウイグル語題記銘文に關する箚記

松　井　　太

中國甘肅省西端のオアシス都市敦煌は，周知のように，多數の佛教石窟（莫高窟・榆林窟・東千佛洞・西千佛洞など）が蝟集する世界有數の佛教聖地であり，また北アジア・中央アジア・西アジア諸地域と中華地域との交流の結節點でもあった。いわゆる「敦煌學」研究においては，上記の石窟とそこに遺された佛教美術資料（壁畫・塑像）に對する考古學・佛教學・美術史研究と，19 世紀極末から 20 世紀初頭以降に莫高窟で發見された，いわゆる「敦煌文獻」に對する歷史學・言語學・佛教學研究が，二つの大きな軸となっている。

しかし，各石窟内部に遺された，漢語・チベット語・西夏語・古代ウイグル語（古代トルコ語）・モンゴル語などの諸言語による題記・銘文資料については，これまでに十分な注意が拂われているとは言い難い。これらの銘文資料は，大きく二種に分類できる。第一は，石窟の造營や重修に關わった當地の政治權力者や有力支配者を描いた供養人像を同定するための傍題である。第二は，ユーラシア各地から敦煌石窟を訪れた佛教巡禮者が，自身の巡禮を記念するために書き殘したものである。この兩種とも，いずれも，敦煌石窟および敦煌佛教を支えた政治權力の構造や，佛教徒たちの宗教活動・信仰の態樣をうかがうための資料となり得る點で，歷史學的な價値を有するものである。

これらの銘文類のうち，漢語銘文については，謝稚柳『敦煌藝術序錄』（上海，1955 年）や敦煌研究院『敦煌莫高窟供養人題記』（文物出版社，1986 年。以下，DMGD と略）をはじめとして，一定程度の研究が蓄積されてはいる。しかしながら，それ以外の言語，特に西曆 10 ～ 14 世紀に屬する古代ウイグル語の題記銘文については，質・量ともに研究は十分ではなかった[1]。

このような状況を大きく進展させたのが，1998 年に，James Hamilton・牛汝極（Niu Ruji）兩氏

[1] 1907 ～ 1908 年に莫高窟を調査した Paul Pelliot は，漢語の題記銘文に加えて古代ウイグル語やモンゴル語などの非漢語銘文についても手稿に模寫を作成していた。Pelliot の没後，彼の手稿は *Grottes de Touen-houang*（Paris, 1981-1992; 以下 GTH と略）として飜刻・影印出版された。ただし Pelliot は，1907 ～ 1908 年の敦煌調査時點ではウイグル文字・ウイグル語に通曉していなかったため，その模寫は不正確である。GTH でも模寫の影印のみにとどまり，彼自身の解讀・校訂テキストは提示されていない。從って，Pelliot の模寫にもとづいてウイグル文字モンゴル語銘文の解讀を試みた薩仁高娃 2006 の校訂案も注意を要する［cf. Matsui 2008c, p. 29, fn. 18］。これら以外に，莫高窟・榆林窟のウイグル語銘文を解讀した個別の研究としては Kara 1976，モンゴル語銘文については敦煌研究院考古研究所・内蒙古師範大學蒙文系 1990 が特に優れている。

論文37

が發表した共同論文［Hamilton / Niu 1998］である。Hamilton / Niu 1998 は，合計 20 条の楡林窟のウイグル語銘文を，寫眞複製にもとづいて解讀・校訂した。筆者は，この論文に導かれて，2006 年に楡林窟のウイグル語銘文を調査し，その成果の一部を Matsui 2008c 論文として發表した。その後，筆者は 2010 年から 2012 年の３カ年にわたって，莫高窟・楡林窟・東千佛洞のうち，合計 87 窟を調査する機會を得て，ゆうに 100 条を超える古代ウイグル語・モンゴル語の題記銘文資料を實見することができた。

ただし，原則的に，石窟内で銘文の寫眞を撮影することは許可されず，また照明裝置なども不十分な状況のもと，ごく短時間の間に資料のすべてを完全に解讀することは不可能であった。また，この間に筆者が調査し得たのは，合計 700 窟を超える敦煌地域の諸石窟の總數からすれば一割程度に過ぎず，銘文資料の網羅的な把握にはなお多くの時間を要する。

とはいえ，筆者がこれまでに調査した古代ウイグル語・モンゴル語題記銘文のなかには，上述したような敦煌諸石窟をめぐる歴史を解明するための重要な情報を含むものもある。また，これらの銘文資料は，年月の經過とともに褪色・摩滅が進行しており，さらには壁畫・塑像などの美術資料の保全を優先するあまり，壁畫などの補修の際に誤って塗抹されてしまう危險もある。

そこで本稿では，筆者が調査し得たウイグル語題記銘文からうかがえる様々な情報を提示することで[2]，敦煌諸石窟の諸言語題記銘文資料の歴史資料としての重要性を示し，その悉皆調査に向けて學界の注意を喚起することとしたい。

１．楡林窟第 39 窟のウイグル貴人像の傍題

楡林窟第 39 窟は，いわゆる「沙州ウイグル期」，すなわち敦煌（沙州）がウイグル勢力に支配されていた時期（11 世紀初頭～中葉）に屬する。この前室甬道南壁には合計 23 體のウイグル男性供養人像，北壁には合計 32 體のウイグル女性供養人像が描かれる[3]。

北壁の女性供養人群像は上下二段に分かれており，上段の先頭（西端＝左端）は比丘尼像である。これに續く東（＝右）隣の女性供養人像が，俗人女性のなかで最高位の重要人物と考えられる。この女性供養人像の西（＝左）隣に附随する赤褐色の短冊内には，半楷書體のウイグル語銘文１行が記されており，すでに森安孝夫により以下のように解讀されている［森安 2011c, p. 521］。

銘文 1A：　楡林窟第 39 窟・前室甬道北壁【圖版 1–1】

tngrikän oγšaγu qatun tngrim körki bu ärür qutluγ q[ïv]lïγ bo(l)maqï bolzun

[2] 本稿におけるテキスト轉寫は，原則的に SUK に準據する。［ABČ］は破損・缺落箇所の推補，（ABČ）は殘畫から復元されたテキスト，- - - は褪色・破損して判讀できない箇所を示す。

[3] 段文傑（編）『中國敦煌壁畫全集 10 敦煌西夏元』天津人民美術出版社, 1996, 圖 10-13 にカラー圖版が公刊されている。

論文37

「これは神聖なオグシャグ可敦(＝皇后)の肖像である。彼女が天寵を得て幸福となりますように！」
"This is the portrait of Her Majesty of Holy Empress Oγšaγu. May she be favored by Heaven and fortunate!"

この「オグシャグ可敦（oγšaγu qatun)」は，「神聖な（tngrikän)」「殿下（tngrim)」という尊稱［Moriyasu 2001, p. 164; 森安 2011a, p. 30］を伴っている點からみて，ウイグル王室の一員と考えてよい。おそらく，對面する甬道南壁の先頭に描かれるウイグル男性供養人の夫人か，あるいはこの男性供養人の娘であったものがウイグル王室に嫁いだのであろう。

ところで，このウイグル男性供養人は無檐三叉冠を着用している。これと同様の無檐三叉冠を着用するウイグル供養人像は，ベゼクリク（Bezeklik）石窟の西ウイグル供養人像にも多數見出される。これらの西ウイグル供養人像の美術史的研究によれば，ウイグル王族ではない貴族・官員は無檐三叉冠を着用するのに對して，ウイグル王・王族は蓮瓣形鏤花高冠を着用する［Battacharya-Haesner 2003, pp. 352–355, MIK III 4524; Russell-Smith 2005, pp. 24–25］。この點から，我々が檢討する楡林窟第 39 窟のウイグル男性供養人も，ウイグル王族より下位にあった貴族と考えられている［謝靜・謝生保 2007, p. 83; 竺小恩 2012, pp. 39–40］。

このウイグル男性供養人の西（＝右）隣には，傍題のための綠色の短冊が附随している。從來，この傍題のウイグル銘文は褪色して判讀できないと報告されていた。しかし筆者は，實見調査を通じて，この 1 行の銘文を以下のように解讀することができた。この銘文は，半楷書體で書かれており，對面するオグシャグ可敦の傍題と同時代に屬することは確實である。

銘文 1B：　楡林窟第 39 窟・前室甬道南壁【圖版 1–2】

il'ögäsi sangun ögä bilgä bäg qutï-nïng körmiš ätöz-i bu ärür qutluγ qïvlïγ bolmaqï bolzun yamu

「これはイル=オゲシ(宰相)のサングン=オゲ=ビルゲ=ベグ閣下の，見たままのお姿(ご眞影)である。彼が天寵を得て幸福となりますように！」
"This is the truly-observed-like portrait of His Excellency of the Minister (*il ögäsi*), Sangun-Ögä-Bilgä-Beg. May he be favored by Heaven and fortunate!"

【語註】

1Ba, il'ögäsi : この「イル＝オゲシ（il'ögäsi ~ il ögäsi)」は，周知の通り，漠北のウイグル可汗國時代から西ウイグル時代を通じて用いられるウイグル語の稱號であり，漢文資料では頡于迦斯～頡於迦斯と音寫される。その原義は「國（il）の顧問（ögä)」であり，實際にはウイグル可汗國・西ウイグルの最高位の臣僚すなわち「宰相・摂政」であった［Moriyasu 2001, pp. 175–177］。本處では，通常の形（'YL 'WYK'SY = il ögäsi）とは異なり，一筆で續けて 'YL'WK'SY = il'ögäsi と書かれている。同樣

論文37

に，'YLWYK'SY = ilögäsi と綴られた例が，Krotkov 収集のウイグル語書簡 SI 2Kr $17_{53,55}$ にみえる［Tuguševa 1971, pp. 176, 185］。

1Bb, sangun ögä bilgä bäg : ここで描かれる男性供養人本人をさすと考えられる。ウイグル語サングン（sangun）は，本來は漢語「將軍」の借用語であるが，五代・宋代の漢文資料ではそのことが忘れられ，「相温；詳温；索温；娑温；撒温」などと音寫される。ウイグル語 ögä は「顧問；大臣」を意味する稱號で，漢文資料では「于越；鳴瓦」などと音寫される。後續のビルゲ＝ベグ（Bilgä-Bäg, 原義は「賢明なる首領」）は，確實に，この供養人像の個人名と考えられる。先行する「サングン＝オゲ（sangun ögä）」は，ビルゲ＝ベグに與えられた尊稱・美稱か，それとも「將軍（兼）宰相；軍機大臣」のような官稱號・職名であったか，決定できない。同じく「サングン＝オゲ（sangun ögä）」という稱號を有する者として，高昌出土のいわゆるウイグル文「第三棒杭文書」第 14 行にアルプ＝サングン＝オゲ＝アルプヤルク（Alp Sangun Ögä Alpyaruq）という人物がみえる。彼は，第三棒杭文書で記念される佛教寺院の施主タルドゥシュ＝タプミシュ＝ヤヤトガル（?）長史（Tarduš Tapmis Yayatγar(?) čangšï）の義父（qadïn）であり，西ウイグル王國の上級支配層に屬していたことが知られる［Moriyasu 2001, pp. 187, 195］。

1Bc, qutï :「天寵（qut）」に所有語尾＋ï が接續したもので，しばしば「陛下；殿下；閣下；猊下」に相當する尊稱として用いられる［森安 2011a, pp. 29–31］。一方，この男性ウイグル供養人の呼稱には，對面するオグシャグ可敦のような「神聖な（tngrikän）」・「殿下（tngrim）」という尊稱が含まれない。この點からも，この男性供養人は，高位・上層のウイグル貴族ではあるがウイグル王族の出身者ではなかったと推測でき，美術史的研究から得られた結論を補強する。

1Bd, körmiš ätöz : ätöz「身體，肉體」は 'TWYZ と綴られており，通常の形（'T'WYZ = ät'öz）と若干異なる。本處の körmiš ätöz で「（本人を）見たままの姿；眞影」と解釋する。

さて，この楡林窟第 39 窟の他にも，敦煌諸石窟には「沙州ウイグル期」に屬する石窟が散在する［劉玉權 1990, p. 242］。この「沙州ウイグル」については，①天山東部に本據地を置いた西ウイグル王國の支配下にあった一派とみなす説と，②西ウイグル王國から離れた分派と東方から移住した甘州ウイグルが合流して沙州地域で独立した王國とみなす説が對立している。①説を主張する森安孝夫は，多數の論據を擧げて②説を批判している［森安 2000; 森安 2011c, p. 529］。さらに，上に言及した，西ウイグルと沙州ウイグルの供養人像に關する美術史的研究も，兩者の裝束・服飾文化が完全に共通することを示している［謝靜・謝生保 2007］。從って，この楡林窟第 39 窟のウイグル男性供養貴人像も，西ウイグル支配層に屬していたと考えられる。

現在までに知られている限り，東部天山～トゥルファン地域から出土した西ウイグル王國時代のウイグル語文獻のなかには，この楡林窟第 39 窟にみえる「イル＝オゲシ（宰相）のサングン＝オゲ＝ビルゲ＝ベグ（il'ögäsi sangun ögä bilgä bäg）」や「オグシャグ可敦（Oγšaγu qatun）」と完全に一致する名稱をもつ貴人の存在は，いまだ發見されていない。ただし，上掲語註 1Ba で言及した Krotkov 収集ウイグル文書 2Kr 17 の一部（第 55–71 行）は，「イル＝オゲシ（宰相）のビルゲ＝ベグ

論文37

(il ögäsi bilgä bäg)」からアルスラン＝タシュ都督（Arslan-Taš totoq）という人物に宛てられた書簡の草稿（または習書）である[4]。この 2Kr 17 文書は典型的な半楷書體で書かれているので明らかに西ウイグル時代に比定され，その點では，本銘文 1B とほぼ同時代のものといえる。サングン＝オゲ（sangun ögä）の稱號を缺くため斷定はできないものの，この 2Kr 17 文書で言及される「イル＝オゲシ（宰相）のビルゲ＝ベグ（il ögäsi bilgä bäg)」が，銘文 1B の「イル＝オゲシ（宰相）のサングン＝オゲ＝ビルゲ＝ベグ（il'ögäsi sangun ögä bilgä bäg)」と同一人物である可能性を指摘しておきたい。

その一方で，上掲語註 1Bb にみたように，この男性供養人像と同じ sangun ögä という稱號（尊稱または官號）を有する有力貴族が西ウイグル支配層に見出されることには注意を要する。さらに，西ウイグル王國の支配層には，「沙州將軍（šaču sangun)」という稱號を有する有力者もおり，西ウイグルの沙州＝敦煌支配を擔當していたと考えられている［森安 1980, p. 334; Moriyasu 2001, pp. 152–153, 167］。あるいは，この楡林窟第 39 窟のウイグル男性供養人ビルゲ=ベグは，西ウイグル王國から沙州＝敦煌地域の統治を委ねられた「沙州將軍（šaču sangun)」その人であり，それゆえに「サングン＝オゲ（sangun-ögä)」の稱號を名乘っていたのかもしれない。

２．莫高窟第 332 窟のモンゴル裝束供養貴族夫妻

莫高窟第 332 窟は，初唐に創建され，五代・モンゴル時代・清代に重修された。主室にいたる甬道の兩側（南壁・北壁）には，五代期の供養人像の上から塗り重ねる形で，モンゴル期の供養人像が描かれている。南壁にはモンゴル裝束の男性供養者三體と從者二體，北壁にはモンゴル女性貴人特有の顧姑冠（boγtaγ）を着用する女性供養人三體と子女一體が描かれる。この供養人像は，モンゴル支配者層の敦煌佛教への歸依・支援を示すものとして著名であり，すでに圖版も公刊されている[5]。

これらの供養人像は，綠色の枠線で區畫を設けた中に描かれている。その枠線には，草書體のウイグル字銘文が記されている。特に，北壁の女性供養人像に附された銘文（下記銘文 2C）がモンゴル語ではなくウイグル語であること（末尾はウイグル語 ol「～である」）は，既刊行の圖版からも確認でき，モンゴル時代の河西におけるモンゴル支配層とウイグル佛教徒との密接な關係を示すものである。このことは，すでに舊稿［松井 2008a, p. 37; Matsui 2008b, p. 169］でも指摘したが，舊稿執筆時點では現地調査を經ていなかったため，銘文のテキストは提示していなかった。この間

[4] Tuguševa 1971, p. 175; 森安 2011a, p. 21. Tuguševa 論文は本文書の第 1 ～ 71 行のテキストを校訂・公刊しているが，實際には，この後に，同一筆跡で書かれた佛教的テキスト 30 行（内容は第 71 行以前と無關係）が續いている。筆者はこのことを，2011 年 2 月にロシア科學アカデミー・サンクトペテルブルク東方文獻研究所に所藏される原文書を實見調査して確認した。原文書の調査を許可され，種々の便宜を圖って下さった同研究所長の Irina Popova 博士に，この場を借りて深謝する。なお，書簡の宛名を Tuguševa は Arslan-Taγ と轉寫したが，末字の -γ = -X は他處との比較からも –š と訂正できる。

[5] 敦煌文物研究所（編）『中國石窟敦煌莫高窟』第５卷，平凡社，1982, 圖 161, 162; 段文傑（編）『中國敦煌壁畫全集 10 敦煌西夏元』天津人民美術出版社，1996, 圖 175, 176; 謝靜 2008.

論文37

の現地調査で，銘文全體を判讀することができたので，以下に提示する。

銘文 2A： 莫高窟第 332 窟・甬道南壁，先頭の男性供養人像の西側の縦邊【**圖版** 2–1】

[ ]D(.)y [ ] ön(š)i-ning körki ol

「‥‥‥‥‥‥‥‥院使の像である」 “[This is] the portrait of the *önši* (*yuan-shi*), [… ’s].”

銘文 2B： 莫高窟第 332 窟・甬道南壁，最後尾の男性供養人像の東側の縦邊【**圖版** 2–1】

män s(o)sï tu küsüš ödigläp yụ̈kündüm

「私ソシ都統が望みを記しつつ禮拝した」 “I, Sosï-*tu*, wrote (my) wish and worshipped.”

銘文 2C： 莫高窟第 332 窟・甬道北壁，女性供養人像の西側の縦邊【**圖版** 2–3】

[ ](-ning?) körki qïzïm la[čï]n tigin-ning’ol

「‥‥‥‥‥‥(の?)像は，私の娘ラチン＝ティギンのものである」
“The portrait of [. . . . .] is of my daughter, La[čïn]-Tigin’s.”

【語註】

2A： モンゴル期の漢語の官名「院使」を借用した Uig. önši は，カラホト出土のモンゴル時代のウイグル語書簡（F9:W105）にもみえる［梅村・松井 2008, p. 192］。

2B： この銘文の筆者 Sosï tu の稱號 tu は，漢語「都統」の借用語 tutung の略筆である。人名のソシ（Sosï）の語源は不明であるが，あるいは漢語「像師」に由來するかもしれない。

2C：「私の娘ラチン＝ティギン（qïzïm Lačin-Tigin）」が，北壁の女性供養人像をさすことは疑いない。人名 Lačïn の原義は「鷹」で，元代の漢文史料では剌眞・臘眞と音寫される。周知の通り，Tigin は男性王族をさした。この lačïn と tigin は，どちらも女性の人名・稱號として使用された例が確認されている［Zieme 1978, pp. 81, 82; Moriyasu 2001, p. 166］。

さて，上掲の銘文 2A・2B・2C が，本窟に描かれるモンゴル期の供養人像に關係する傍題であることは確實である。一方，供養人像の裝束は，典型的なモンゴル貴族層・支配層のものである。ここから，供養人がモンゴル族出身か，それともウイグル族出身か，という問題が生じる。供養人がモンゴル族出身である場合，彼らを描いた供養人像の傍題がモンゴル語ではなくウイグル語で記

論文37

されていることは，モンゴル人の佛教文化受容に際してウイグル人佛教徒が大きな影響を與えたことをあらためて示す。逆に，もしも供養人がウイグル語を母語とするウイグル族である場合，彼らが典型的なモンゴルの装束をしていることは，ウイグル語を用いるウイグル佛教徒の一部が河西地域のモンゴル支配層に組み込まれていったことを反映する。いずれにせよ，すでに拙稿［松井 2008a, p. 37; Matsui 2008b, p. 169］で指摘したように，敦煌地域におけるモンゴル支配層とウイグル佛教徒が，佛教を媒介として強固に結びついていたことがうかがえる。

なお，2A・2B・2Cの筆跡から判斷すると，これら３条の銘文はすべて2Bの筆者ソシ都統により書かれたものと推定される。とはいえ，彼が北壁に描かれた女性貴人ラチン=ティギン（2C）の父親であるかは，卽斷できない。

３．楡林窟第 12 窟の威武西寧王家關係ウイグル語題記銘文

この銘文は，楡林窟第 12 窟に遺る多數のウイグル語題記銘文の一つであり，Hamilton / Niu 1998 によりInscription Hとして紹介された。筆者は舊稿で，2006 年の實見調査に基づく校訂テキストを提示しつつ，この銘文がモンゴル時代にハミ（哈密, Qamïl）に據點を置いた東方チャガタイ系チュベイ（Čübei）一族の威武西寧王ブヤン=クリ（Buyan-Quli）の屬僚たちにより記されたことを明らかにした［Matsui 2008c, Inscription H］。

ところが，この間の調査で，より優れた調査機材などを利用して再檢討した結果，舊稿のテキストを修正すべきことが判明したので，ここにその結果を提示する。

銘文 3A： 楡林窟第 12 窟・前室甬道南壁

1 quḍluγ [luu] yïl (.....)
2 YYL(…) (…)
3 qaγan-qa (s)oy[u]rqadïp qamïl-qa in[čü? birilgä]n?
4 [b]uyan qulï ong bašlaγ-lïγ biz X'D(....) P(....)
5 [ ]ḍämür qïsaq-čï napčik-lig qamču taγa[y?]
6 [ ](.) ṭaruγačï-nïng oγ[u]lï tärbiš bašlap
7 [ ]KWY-lär birlä kä[li]p
8 [ ] ong-nïng s(u)buryan süm-ä-tä kälip
9 [yan]mïš-ta bu süm-ä-ta män yavlaq baxšï [
10 [bï]žï (b)itig-či tämür kin körgü
11 [ödig] bolzun tip bitip bardïmïz
12 saṭu saṭu bolzun

「①幸いなる［龍］②年［某月某日］……③皇帝に恩賜させてハミに［封領（inčü）を(?)與えられた

論文37

(?)］④ブヤン=クリ王（Buyan-Qulï ong）を頭とする，私達 X'D(....), P(....), ⑤····=テミュル（[…]-ḍämür）車輛係，ナプチク（Napčik）のカムチュ=タガイ（Qamču-Taγay），⑥····ダルガチの息子のテルビシュ（Tärbiš）たちが，⑦[…]KWY たちと共に來て，⑧····王の塔の寺（s(u) burγan süm-ä）に來て，⑨[歸る］時に，この寺で，私（すなわち）拙劣な師僧（である）⑩[····]-[bï]žï と書記テミュルが，“後に見るべき⑪［記念］となりますように！”と書いて，出發した。⑫善哉，善哉」

“$_{1}$The fortunate year of [Dragon, ...th month, on ....th day. $_{2}$ .....] $_{3\text{-}4}$With Prince [B]uyan-Quli (who is) favored by the Emperor and [given] the fief in Qamïl at the head, $_{4}$we, X'D(....), P(....), $_{5}$the cart-driver [.....]-ḍämür, Qamču-Taγay from Napčik [.....], $_{6}$as well as Tärbiš (who is) the son of the Governor General [.....], $_{7}$coming together with *[...]KWYs*, $_{8}$came to the Tower-temple of Prince [.....], and, $_{9}$when we [return], in this temple, I, an inferior master $_{10}$[.....]-*bïžï* (and) the secretary Tämür wrote (this inscription), saying $_{11}$“May it be (the memory) to see later!”, and departed. $_{12}$*Sādhu, sādhu*, may it be (good).”

【語註】

3A2 : 舊稿ではこの行の存在を見落としていた。

3A3, qaγan-qa (s)oy[u]rqadïp in[čü? birilgä]n? : qaγan-qa を舊稿では qaγan qatun と誤讀していた。「皇帝に恩賜させて（qaγan-qa soyurqadïp）」という表現は，亦都護高昌王世勳碑ウイグル文面の第 III 截第 45, 49 行にもみえる［Geng / Hamilton 1981, p. 20; 劉迎勝・卡哈爾＝巴拉提 1984, p. 67］。行末部分について，舊稿では単に Y[…]N と飜字しただけであったが，破損部分の直前の Y 字は實際には 'YN- と解讀できた。そこで，この破損部分には，第 4 行のブヤン=クリ王（Buyan-Qulï ong）がハミを根據地とした威武西寧王ブヤン=クリに同定できることを念頭に置き，「封領を與えられた（inčü birilgän）」という文脈を推補した。テュルク語 inčü ~ enčü「封臣，領民；封土，封領」は，西暦 10 ～ 11 世紀前後のウイグル文書や，コータン語のいわゆる Staël-Holstein scroll にも在證されており，さらにモンゴル語にも inǰü ~ ömčü として，またペルシア語にも īnčū として借用されている［村上 1951; TMEN I, Nr. 670; MOTH, p. 91; 森安 1991, p. 196］。

3A4, [b]uyan qulï ong : 舊稿の時點では人名 Buyan の語末の -N しか讀み取れていなかったが，この間の調査により，確實に [P]WY'N = [b]uyan と判讀できた。これにより，チャガタイ系チュベイ一族の威武西寧王ブヤン=クリ（Buyan-Quli）との比定をより確實なものとすることができる［Cf. Matsui 2008c, pp. 19–20］。

3A5a, [ ]ḍämür : 頻出する人名要素 tämür が，別の人名要素に後續するため –D'MWR = -ḍämür と書寫されたもの。舊稿では動詞完了形の –mïš / -miš に由來する人名と推測して (...)MYŠ と飜字したが，改める。

3A5b, napčik : この地名ナプチク（Napčik）は，唐代の「納職」に由來し，ハミの西方約 50 km の地

論文37

點に位置するラプチュク（Lapčuq > 拉布楚喀，拉甫楚克）に比定される［森安 1990, pp. 72–80; Matsui 2008c, p. 20］。

3A6, oγ[u]lï : 舊稿の quščï「鷹匠」を改める。

3A8, s(u)burγan süm-ä : 舊稿では (.)YPWR(....) とするのみにとどまったが，この間の調査で S(.)PWRX'N = s(u)burγan と判讀できた。テュルク語 suburγan が「墓」を意味するのに對し［ED, p. 792］，これを借用したモンゴル語 suburγan は「塔；塔形の墓」を意味する［Lessing, p. 733; MKT, p. 949］。モンゴル時代の楡林窟が墓所であったとは考えにくく，また本處ではモンゴル語 süme ~ süm-e から借用された süm-ä「寺」が後續することからも，モンゴル語に卽して s(u)burγan süm-ä で「塔寺」と解釋したい。

3A9, bu süm-ä-ta : 舊稿の buyanïmïz-(nï) ta を改訂する。

3A10a, [bï]žï : 後半の -Z-Y がみえることから補う。この佛教的稱號 bïžï は漢語の「毗尼（< Skt. vinaya）」に由來する可能性があるが，音韻上からはなお問題が殘る［Matsui 2012c, p. 120］。

3A10b, (b)itig-či : 周知の通り，「書記」。舊稿では (P)Y(....)K-čï と推測するにとどまっていたが，改める。

3A10c, kin körgü : 舊稿の kin körmiš-[tä]「後に見た［時に］」を訂正する。

3A11a, bitip : 舊稿の sümtä「寺において」を改訂する。

3A11b : 舊稿では，「行った（bardïmïz）」の後に「私(?)が書いて(?)（män(?) bi[t]i(p?)）」というテキストを提示していたが，これは別人の手になる題記であった。

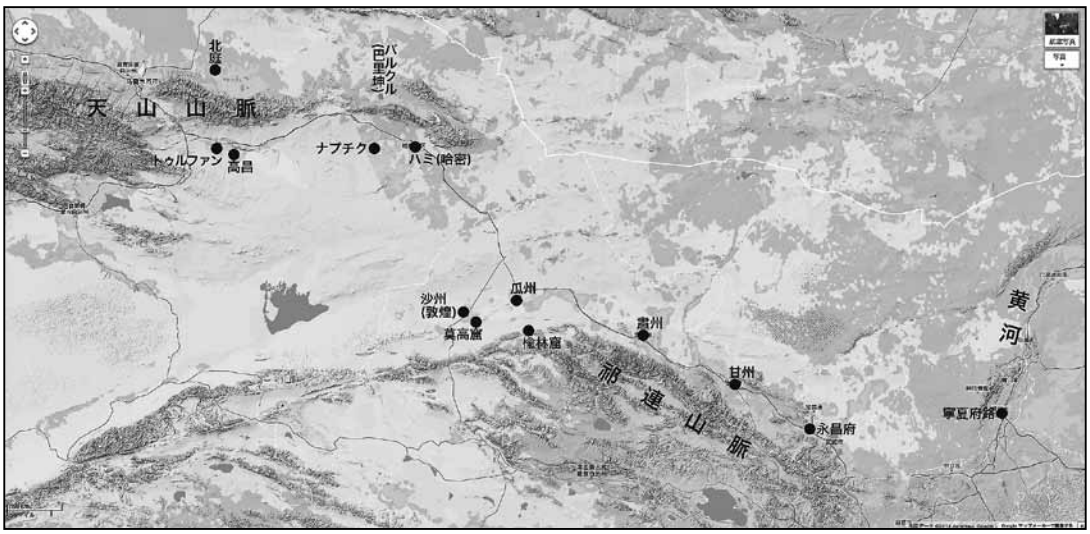
3A12, saṭu saṭu bolzun :「善哉，善哉（< Skt. sādhu sādhu）」。舊稿の quḍ[luγ] bolzun を改める。また，舊稿でこの後に轉寫していた「私達は行った（bardïmiz）」は，前行末の別人の題記に續くものであった。

以上，筆者の未熟ゆえに，いささか多岐にわたって誤讀を修正することとなった。しかしながら，舊稿で提示した銘文全體の內容理解を大きく變更するものではない。

ところで，最近，楊富學・張海娟兩氏は，筆者が舊稿で提示した本銘文の校訂を利用しつつ，①この銘文の「ブヤン＝クリ王」すなわち威武西寧王ブヤン＝クリが元代漢文史料にみえる「邠王嵬厘；豳王嵬力」と同一人物であること，②當時，威武西寧王がナプチク（Napčik < Chin. 納職）つまり現在のラプチュク一帶を根據地としていたこと，③本來はモンゴル族であるブヤン＝クリ王が楡林窟巡禮に際してウイグル語で銘文を殘すほどに，元代のモンゴル支配層が「ウイグル化」していたこと，を主張している［楊富學 2011, pp. 102–103; 張海娟・楊富學 2011, pp. 88–89; 楊富學・張海娟 2012］。

しかし，これらの所說には，いずれも贊同できない。①の點は『元史』順帝本紀・至正十二年壬辰（1352）秋七月の「邠王嵬厘」への恩賞の記事を，本銘文第３行の「皇帝に恩賜させて（qaγan-qa (s)oy[u]rqadïp）」という一節と關連させるものであるが，他に傍證史料は全く無く，牽強附會と言わざるを得ない。そもそも，チュベイ一族の「宗家」の地位を占める豳王（邠王）家は肅州を，

論文37



また「分家」にあたる威武西寧王家＝肅王家がハミを據點としていたことは鐵案であるから［杉山 1982, 杉山 1983 = 杉山 2004, pp. 242–333］，兩者をあえて同一視する必然性も無い。②は，巡禮者の一人であるカムチュ=タガイ（Qamču-Taγay）がナプチク（Napčik）の出身であることを擴大解釋したに過ぎない。③も，この銘文自體は威武西寧王ブヤン=クリの家臣によって書かれたものであり，ブヤン=クリ本人がこの巡禮に參加していたかどうかは内容からは判斷できないので，いささか武斷に過ぎる。また，すでに報告されているように，莫高窟・榆林窟にはモンゴル時代の巡禮者がモンゴル語で書いた題記も多數殘っていることにも注意する必要がある［敦煌研究院考古研究所・内蒙古師範大學蒙文系 1990］。

モンゴル時代河西地域のモンゴル王家とウイグル人佛教徒との關係については，前節で扱った莫高窟第 332 窟のモンゴル裝束の供養人像などともあわせ，より多くの事例から詳細に檢討することが必要であろう。

4．敦煌諸石窟とウイグル人の佛教巡禮圈

これまで學界に紹介されている限りでは，敦煌地域の諸石窟に題記銘文を遺したウイグル人・モンゴル人巡禮者の出身地・本貫地・居住地としては，莫高窟直近の敦煌（沙州 > Uig. Šaču），榆林窟直近の瓜州（Qaču），さらに東方の肅州（Sügčü, 酒泉）・甘州（Qamču, 張掖）や，西方の天山山脈東端のハミ（Qamïl, 哈密＝伊州）が多く言及される。言及される地名で最東端に位置するのは永昌府（> Yungčang-vu），また最西端は前節（語註 3A5b）に擧げたナプチク（Napčik）であって，西ウイグル王國の地理的中心であったトゥルファン地域の地名は確認されていなかった［Matsui 2008c, pp. 27–29; 上掲地圖參照］。

しかしながら，この間の現地調査を通じて，10 ～ 14 世紀の西ウイグル王國の主要都市であった

論文37

高昌（Qočo, 西州）・トゥルファン（Turpan > Turfan > 吐魯番）からの巡禮者の題記を確認することができた。以下，銘文 4A・4B・4C として紹介し，個別に檢討を加える。

銘文 4A： 楡林窟第 31 窟・主室南壁，東側の天請問經變圖の中央下部の肌色の短冊部分。半楷書體～半草書體ウイグル銘文７行。その後にブラーフミー文字が 3 ～ 4 字ほど書かれている。銘文の中央部分は摩滅・褪色が著しく，第５行を含めて十分に判讀できない。

1 qutluγ bičin yïl - biz (qoč)o-luγ
2 adityaẓin šilavant(i) - - - - - - - - - - - - - - - - - - - yu̯künüp bu
3 darm qur-ta - tüz täginip
4 bkčan-qa - küsüš-läri
5 köngül-[iy]in q̇anzun • nom? säkiz? tuyu? kič? TW(…) tört
6 tuγum biš aẓ̲un-tïn - - - - - - - - - - - - tüzü biz-[täg] burxan qutïn
7 bulzun - küsüšüm q̇anzun

「①幸いなる猿年［□月□日に。……］私達，高昌出身の②アディティヤシン律師……禮拝して，この③佛法の窟で……等受して，④安居に……もろもろの望みが⑤心のままに滿たされますように！　法？８？覚えて？久しく？……四⑥生五道から……等しく私達［のように］佛果を⑦得ますように。……私の望みが滿たされますように！」

"$_{1}$The fortunate year of Monkey, [the ...th month, on the ...th day. .....]. We, $_{2}$Adityaẓin-*šilavanti* from Qočo [and .....] worshipped, and $_{3}$in this cave of dharma [.....] getting flat (= attaining enlightenment), $_{4}$for the rest-stop (*bkčan*) [.....] $_{4-5}$may (their) desires be satisfied as (their) heart (wish). *Dharma*? Eight? Awared? Ever? [.....] $_{6}$from the Four Births and Five Existences [.....] $_{6-7}$(they) shall attain Buddhaship altogether like us. $_{7}$[.....] May my desire be satisfied!"

【語註】

4A2a, adityaẓin šilavant(i) : Uig. adityaẓin はサンスクリット語 ādityasena に由來する人名，また šilavanti はサンスクリット語 śīlava(n)t「佛僧，持戒者；律師」に由來する稱號である［Zieme 1981, p. 249］。第 1 行に「私達（biz）」とあることからみて，本處に後續する部分には，同行した巡禮者の名が記されていたと推測される。

4A3a, darm qur : qur は Chin. 窟 **k'uət*（GSR 496q）の音寫［Matsui 2010, p. 704］。すなわち，darm qur で「佛法（darm < Skt. dharma）の窟；法窟」の意となる。これが，本銘文が書き殘された楡林窟第 31 窟のみをさすのか，それとも楡林窟全體の總稱であるのかは卽斷できない。

4A3b, tüz täginip : ウイグル譯『雜阿含經』に Chin. 止觀一心等受 = Uig. d(i)yan-ta bilgä bilig-tä bir učluγ köngül tüz-in täginip「止觀（＝禪定 diyan ＋智慧 bilgä bilig）において一心に等受して」という

論文37

對譯例がみえる［庄垣内 1984, p. 62; 庄垣内 2003, pp. 264–265］。

4A4, bkčan : Toch. A pākäccāṃ / B pakaccāṃ「夏安居」からの借用語［吉田 1993, p. 113; 吉田 2007, p. 62］。

4A4-5, tört tuγum biš aẓun : tört tuγum は佛教用語の「四生（卵生・胎生・濕生・化生）」，biš ažun は「五道（天道・人間道・地獄道・餓鬼道・畜生道）」にあたる。特に，輪廻として「五道」がみえるのは，ウイグル佛教の母體となったトゥルファン地域のトカラ佛教，および佛教に先んじてウイグル人に流入していたマニ教の影響と考えられている［森安 1985a, pp. 35–36, fns. 41, 42］。

さて，この銘文 4A の筆者であるアディティヤシン律師は，「高昌出身（qočo-luγ）」と自稱している。すなわち，彼は，高昌すなわちトゥルファン地域から楡林窟への巡禮さらには當地での安居（bkčan）を實施し，その記念に本銘文を書き殘したことになる。

ちなみに，楡林窟第 19 窟の主室甬道南壁および同第 26 窟甬道南壁にも「私アディティヤシンが禮拝します（adityaẓin yụkünürmän）」[6]，同第 36 窟主室甬道北壁に「私アディティヤシンが謹んで禮拝した（adityaẓin yụkünü tägintim）」という銘文があり，さらに莫高窟第 444/445 窟の入口外・北側の壁にも「私アディティヤシンが禮拝します（adityaẓin yụkünürmän）」という銘文が見出される。筆者が實見したところでは，これらの銘文の筆跡は，いずれも本銘文 4C に酷似する半楷書體～半草書體であり，同一人物の筆跡とみて差し支えない[7]。このアディティヤシン律師は，楡林窟だけでなく，直線距離で約 100 km 西方の莫高窟にまで，巡禮の足を伸ばしていたのである。

この銘文は，半楷書體～半草書體で書かれていることから，西暦 10 ～ 12 世紀頃，モンゴル時代以前に屬するものと推定される。特に 10 ～ 11 世紀において，東部天山地方の西ウイグル王國と敦煌の河西歸義軍政權との通交・交流は，きわめて緊密であった[8]。敦煌出土の漢文文書からは，「西州僧」・「伊州僧」つまり西ウイグル（西州＝高昌，伊州＝ハミ）の佛僧が沙州＝敦煌の佛寺を訪問したり，あるいは沙州を訪れた西ウイグルからの使節（「西州使」・「伊州使」）が莫高窟にまで巡禮したことが知られる［榮新江 1996, pp. 365, 367, 371, 378］。このような，敦煌および莫高窟・楡林窟に巡禮した西ウイグルの佛教徒が遺した題記銘文の實例として，本銘文 4A を位置づけることができるであろう。

---

[6] Hamilton / Niu 1998, p. 156 は，楡林窟第 19 窟の銘文（Inscription N）の adityaẓin を ärdinišazïn と誤讀している。この誤讀は，この銘文と併記されるブラーフミー文字が［ā di］tya se na と判讀されることからも訂正できる［Matsui 2008c, p. 29, fn. 18］。

[7] Pelliot の模寫によれば，莫高窟第 197 窟（= Pelliot 第 53 窟）にも「私アディティヤシンが謹んで禮拝いたします（adityaẓin yụkünü täginür män）」，同第 201 窟（= Pelliot 第 59 窟）にも「私アディティヤシンが禮拝します（adityaẓin yụkünürmän）」というウイグル銘文を復元することができる。この兩窟については，敦煌研究院から調査許可を得られなかったため，筆者はこれらの銘文を實見していないものの，本文に示したものと同様に，問題のアディティヤシン律師によって記されたものと確信する。ちなみに薩仁高娃 2006, p. 781 は，Pelliot の模寫によって第 197 窟の銘文を adibra ece yobozu daciluna と試讀したが，訂正すべき［Matsui 2008c, p. 29, fn. 18］。

[8] 森安 1980; MOTH, pp. IX-XXII; 森安 1991, pp. 145-147; 榮新江 1996, pp. 364-385; 森安 2000; Rong 2001; Russel-Smith 2005; 森安 2007, pp. 3, 30-32.

論文37

次に，時代を降って，西暦 13 〜 14 世紀のモンゴル時代に屬する題記銘文を檢討する。

銘文 4B： 楡林窟 33 窟・主室北壁，劫魔變相圖の中央の短冊部分に書かれた草書體銘文。この短冊部分には４行分のスペースがあるものの，實際には３行しか書かれず，末尾には１行分の空白が殘されている。

1 qočo balïq-lïγ-ï darm-a - - - - - - - - - - bu ïduq
2 aranyadan-qa yuḳüngäli kälip yuḳünüp yanar-ta
3 bitiyü tägintim kinki körgü ödig bolzun tip

「①高昌の城民であるダルマ‥‥‥‥‥この聖なる②阿蘭若に禮拜しようとやって來て，禮拜して戻る時に，③私は書き奉った。“後人が見る記念となれ！”と」

“$_{1}$(I), the inhabitant of Qočo-City, Darm-a, ... $_{1\text{-}2}$came to worship to this sacred hermitage. When I return, $_{3}$I wrote (this inscription), saying “May (it) be the memory that posterity should see!”

銘文 4C： 楡林窟 12 窟・甬道南壁，前掲銘文 3A の西側（向かって右，入口側）隣。袋文字で裝飾的に書かれた草書體銘文。

1 XW(。)DYN turpan-lïγ
2 ïnšïṭu (。)

「‥‥‥‥トゥルファン出身のインシドゥ」 “[.....] Ïnšïdu from Turfan”

【語註】

4B1a, qočo balïq-lïγ-ï :「高昌の城民」。所有語尾 –ï が後續していることから，Uig. balïq-lïγ が「城市に屬する者；都城の住民，城民」を意味している。

4B1b, darm-a : < Skt. dharma. 本處では人名であろう。後續部分は不鮮明で十分に判讀できないが，彼の同行者の名が記されていたのであろう。

4B2, aranyadan : サンスクリット語 araṇyayātana「阿蘭若；寂靜處，遠離處」の借用語。これがトカラ語 araṇyāyataṃ ~ araṇyataṃ の仲介形式であることを，Dieter Maue 博士から私信にて教示された。特記して深謝する。

4C1a, XW(. .)DYN : あるいは XW(ČW)DYN = qočodïn「高昌から」と讀めるかもしれない。

4C1b, turpan-lïγ : トゥルファン（Turpan）は，現在の吐魯番（Turfan）市に比定される地名。

論文37

4C2, ïnšïṭu：人名。漢語「恩師奴」または「印師奴」に由來するものか。後續語は第１字のみ書かれて中斷されている。

さて，モンゴル帝國期においてもウイグル人佛教徒が敦煌＝甘肅・河西地域とトゥルファン＝東部天山地方を結んで活發な移動・交流を展開したことは，すでに明らかにされている。それを如實に示す事實としては，①「高昌國（Qočo uluš）」すなわちトゥルファン地域のウイグル王國でウイグル人のために作成され弘通した佛典『觀音經に相應しい譬喩（avadāna）』が，沙州＝敦煌で書寫されていること［庄垣内 1976, pp. 05, 027; 庄垣内 1982, esp. pp. 5–10］，②敦煌を支配するチャガタイ系西寧王家の求めに應じてトゥルファン地域出身のウイグル佛僧が佛典を寫經していること［庄垣内 1974, pp. 044–045, 048; Zieme / Kara 1978, pp. 162–163］，③ 14 世紀後半，大元ウルス（元朝）から「灌頂國師（Mong. gon-ding gui-ši）」の稱號を與えられたチベット佛教の高僧ドルジ＝キレシス＝バル＝サンポ（Dorǰi-Kiresis-Bal-Sangpo）が，高昌や北庭・バルクル（Bars-Köl > Barkul > 巴里坤）などチャガタイ＝ウルス（チャガタイ＝ハン國）支配下の東部天山の諸都市で巡禮・佛教活動を行ない，その際にチャガタイ＝ウルスから與えられた保護特許狀を敦煌まで持ち歸っていること［松井 2008a; Matsui 2008b］，④敦煌出土のモンゴル時代ウイグル語文獻中に，高昌（Qočo）やリュクチュング（Lükčüng < Chin. 柳中）などトゥルファン盆地内の地名に言及する――おそらくはトゥルファン地域から敦煌に發送された――ウイグル語書簡（Pelliot 181 ouïgour, Nos. 203+195+197 recto）が含まれること［森安 1985b, pp. 64–65, 75–87］，などが擧げられる。一方，ここで提示した楡林窟の題記銘文 4B・4C はいずれも草書體で書かれており，西曆 13 〜 14 世紀のモンゴル時代に屬することは確實である。モンゴル時代においても，楡林窟・莫高窟が，トゥルファン地域のウイグル人にとっても重要な佛教聖地となっていたことを確認できる。

ところで，モンゴル時代に「皇慶寺」として重修された莫高窟第 61 窟（Pelliot 第 117 窟）の甬道南壁西側には，西夏期の供養比丘尼像が描かれている。この比丘尼像の西側（＝比丘尼の左脇側）にはモンゴル文題記銘文５行，東側（＝比丘尼の右脇側）には草書體のウイグル語題記銘文４行が殘されている[9]。つとに森安孝夫は，この４行の銘文を部分的に紹介し，銘文の筆者として「高昌出身のムングスズ沙彌（qočo-luγ mungsuz šabi）」がみえることから，モンゴル時代における河西・トゥルファン兩地域間の人的交流を示す傍證とした［森安 1988, pp. 441–442］。しかし筆者は，この銘文を實見調査した結果，森安の見解は若干の修正を要すると考えるに至ったので，以下に全文の校訂テキストを銘文 4D として提示しつつ檢討する。なお現地調査において，この銘文 4D のすぐ東側に，おそらく同一人物の筆寫した２行のウイグル語銘文をも發見した。こちらの銘

[9] この供養比丘尼像については，すでにカラー寫眞も公刊されている：敦煌文物研究所（編）『中國石窟・敦煌莫高窟』第 5 卷，平凡社，1982, pl. 160; 段文傑（編）『中國敦煌壁畫全集 10・敦煌西夏元』天津人民美術出版社，1996, pl. 183. そのカラー寫眞からも，ある程度，モンゴル語・ウイグル語題記銘文を確認することができる。なお，５行のモンゴル語銘文は，敦煌研究院考古研究所・内蒙古師範大學蒙文系 1990, p. 9 によりほぼ完全に解讀・校訂されている。

論文37

文は既刊行の圖錄類では確認できないので，あわせて銘文 4E として校訂案を示す。いずれの銘文も草書體で書かれており，またčölgä, manglay, qour などモンゴル語からの借用語（語註參照）からも，確實に 13 〜 14 世紀のモンゴル時代に比定できる。

銘文 4D： 莫高窟第 61 窟・甬道南壁，草書體ウイグル文４行【圖版 3】

1 yïlan yïlïn tangut čölgä-täki manglay
2 taykim baγatur bu mančuširi bodistv-qa yu̧küngäli
3 kälip yu̧künüp barïr-ta kin-ki körgü bolzun tip qop
4 kiši-tä qour ko̧ngül-lüg qočo-luγ mungsuz šabi qy-a bitiyü tägintim

「①蛇年に，タングト路の前衛②（の萬戸長）タイキム=バアトルが，この文殊菩薩に禮拝しようと③やって來て，禮拝して行く時に，“後人が見るものとなれ！”と，全ての④人のなかでも邪心ある，私こと高昌出身のムングスズ沙彌めが書き奉った」

“$_{1}$In the year of Serpent, (the myriad of) the vanguard of the Tangut Circuit, $_{2\text{-}3}$Taykim-Baγatur came (here) to worship this (statue of) Manjuśrī Bodhisattva. $_{3}$When (he) worshipped and departed, saying “May it be (the memory) that posterity should see!”, $_{4}$I, Mungsuz-*šabi-qya* from Qočo who has the evilest heart among all the people, humbly wrote (this inscription).”

銘文 4E： 莫高窟第 61 窟・甬道南壁，草書體ウイグル文２行。

1 yïlan yïl tangut čölgä-täki
2 manglay-taqï tümän (bä)gi tayk(im)

「①蛇年（に），タングト路の②前衛所屬の萬戸長タイ（キム）」

“$_{1}$In the year of Serpent, $_{1\text{-}2}$the myriad of the vanguard of the Tangut Circuit, Taykim”

【語註】

4D1/4E1, tangut čölgä：周知のように，tangut は漢文史料にみえる「唐古；黨項」すなわちタングトに相當し，西夏人・西夏國およびその支配下にあった河西地域をさす［SUK Mi05; SI Kr IV 638190; Raschmann 2012; Zieme 2012］。これに後續する čölgä は，元代の行政區畫「路」に相當するモンゴル語 čölge の借用語である［cf. Matsui 2008c, p. 27］。從って，本處の「タングト路（tangut čölgä）」とは「西夏路」の謂いであり，舊西夏國の首都であった中興府（興慶，現在の銀川）を治所として設置された元代の西夏中興路，のちの寧夏府路をさすことになる［cf. 高橋（編）2007, p. 237］。

論文37

4D1/4E2, manglay : モンゴル語 manglai「先鋒，前鋒，前衛」の借用語［TMEN I, Nr. 369］。漢文史料では「莽來」と音寫される。

4D2a, taykim baγatur : 人名 taykim はあるいは漢語起源かもしれない。周知のように，baγatur は「英雄，勇士」を意味する人名または稱號である。

4D2b, mančuširi bodistv : < Skt. manjuśrī bodhisattva「文殊菩薩」。これが巡禮對象として言及されるのは，この莫高窟第 61 窟の主尊が文殊菩薩であったからである。

4D4, qour : モンゴル語 qour ~ qoor「毒，悪毒；危害；邪悪，悪意」［Lessing, p. 973; MKT, p. 641］の借用語とみなし，qour kǫngül で「邪心」と考える。自身の佛教信仰が未熟であることを謙遜した表現であろう [10]。

4D5, qočo-luγ mungsuz šabi :「高昌出身のムングスズ沙彌」。ウイグル人名 mungsuz は漢文史料では「孟速思」と音寫される。モンゴル時代の同名人物としては，北庭ビシュバリク（Biš-Baïq）出身のウイグル人で世祖クビライの卽位にも貢獻したムングスズ（孟速思）がいるが，この銘文のムングスズとは別人であろう［cf. 森安 1988, p. 442］。

4E2, tümän (bä)gi :「萬戶長，萬人長」を意味し，モンゴル時代のウイグル語文獻にも在證される。ちなみに，モンゴル語の tümen noyan「萬戶長」を借用した tümän noyïn という形式もウイグル語には在證される［松井 2003, pp. 58–59］。元代の西夏中興路＝寧夏路に「萬戶：萬戶府」が存在したことは，編纂史料中にも確認できる [11]。

さて，上掲のような銘文全體の理解からは，このウイグル語銘文 4D・4E を記したムングスズ沙彌（Mungsuz šabi）は，彼自身の出身地（もしくは本貫）は高昌（Qočo）であったとはいえ，直接には「タングト路」つまり西夏中興路・寧夏府路から西方の敦煌近邊へ出征した萬戶長タイキム＝バアトルに随行して敦煌を訪れた可能性が高い。換言すれば，この銘文は，モンゴル時代の敦煌をめぐるウイグル人佛教徒の巡禮圈の東端が，肅州・甘州・永昌を越えて，さらに東方の寧夏路にまで及んでいたことを推定させる。寧夏路から敦煌に巡禮した佛僧の實例は，莫高窟第 5 窟（Pelliot 第 169 窟）・第 98 窟（Pelliot 第 74 窟）・第 465 窟（Pelliot 第 182 窟）の漢文題記銘文にも見出すことができる［GTH VI, p. 28, fig. 445; GTH III, p. 4, fig. 192; GTH VI, p. 36, fig. 454; DMGD, p. 175; cf. Matsui 2008c, p. 27］。ウイグル人佛教徒の巡禮圈の擴がりが，東方の中華地域からの漢人佛教徒の巡禮とどの程度重なり合うのかという問題や，さらには寧夏路を故地とする西夏人佛教徒とウイグル佛教徒との關係の様相も [12]，今後解明されるべき課題である。

---

[10]『飜譯名義大集（*Mahāvyutpatti*）』では，サンスクリット語の「害心，瞋恚（vyāpāda）」や「暴悪（raudra）」に對應するモンゴル語として qour-tu (~ qouratu) sedkil「邪心」が用いられる［Mvy, Nos. 1603, 1703, 2956］。

[11]『元史』巻 30・泰定帝本紀・泰定三年（1326）十月条「寧夏路萬戶府，慶遠安撫司饑，並賑之」;『元史』巻 39・順帝本紀二・至元三年（1337）正月癸丑「立宣鎮侍衛屯田萬戶府於寧夏」。

[12] 例えば，モンゴル時代の敦煌のウイグル人佛教徒が西夏語佛典を通じて佛教を學習していた可能性を指摘した拙稿［松井 2012a; Matsui 2012b］も參照。

論文37

参考文献目録

Battacharya-Haesner, Chhaya 2003: *Central Asian Temple Banners in the Turfan Collection of the Museum für Indische Kunst, Berlin*. Berlin.

DMGD = 敦煌研究院（編）『敦煌莫高窟供養人題記』文物出版社，1986.

敦煌研究院考古研究所・内蒙古師範大學蒙文系 1990:「敦煌石窟回鶻蒙古文題記考察報告」『敦煌研究』1990–4, pp. 1–19, +5 pls.

Geng Shimin 耿世民 / James Hamilton 1981: L'inscription ouïgoure de la stèle commemorative des Iduq qut de Qočo. *Turcica* 13, pp. 10–54.

GSR = Bernhard Karlgren, Grammata Serica Recensa. Stockholm, 1957.

GTH = Paul Pelliot, *Grottes de Touen-houang*, 6 vols. Paris, 1981–1992.

Hamilton, James / Niu Ruji 牛 汝極 1998: Inscriptions ouïgoures des grottes bouddhiques de Yulin. *Journal Asiatique* 286, pp. 127–210.

Lessing, Ferdinand D. *Mongolian-English Dictionary*. Berkeley / Los Angels. 1960.

劉 迎勝・卡哈爾=巴拉提（Kahar Barat）1984:「亦都護高昌王世勲碑回鶻文碑文之校勘與研究」『元史及北方民族史研究集刊』8, pp. 57–106.

劉 玉權 1990:「沙州回鶻の石窟藝術」敦煌研究院（編）『中國石窟 安西榆林窟』平凡社，pp. 240–253.

松井 太 2003:「ヤリン文書」『人文社會論叢』人文科學篇10, pp. 51–72.

松井 太 2008a:「東西チャガタイ系諸王家とウイグル人チベット佛教徒」『内陸アジア史研究』23, pp. 25–48.

Matsui Dai 2008b: A Mongolian Decree A Mongolian Decree from Chaghataid Khanate Discovered at Dunhuang. In: P. Zieme (ed.), *Aspects of Research into Central Asian Buddhism: In Memoriam Kōgi Kudara*, Turnhout (Belgium), pp. 159–178.

Matsui Dai 2008c: Revising the Uigur Inscriptions of the Yulin Caves.『内陸アジア言語の研究』23, pp. 17–33.

Matsui Dai 2010: Uigur Manuscripts Related to the Monks Sivšidu and Yaqšidu at "Abita-Cave Temple" of Toyoq. 新疆吐魯番學研究院（編）『吐魯番學研究：第三届吐魯番學暨歐亞游牧民族的起源與遷徙國際學術研討會論文集』上海古籍出版社，pp. 697–714.

松井 太 2012a:「敦煌出土西夏語佛典に挿入されたウイグル文雑記」『人文社會論叢』人文科學篇27, 弘前大學人文學部, 2012.2, pp. 59–64.

Matsui Dai 2012b: Uighur Scribble Attached to a Tangut Buddhist Fragment from Dunhuang. In: Rossiskaja Akademija Nauk Institut Vostochnykh Rukopisej (ed.), *Tanguty v Czentral'noj Azii: Sbornik statej v chest' 80-letija professora E. I. Kychanova*, Moskva, pp. 238–243.

Matsui Dai 2012c: A Sogdian-Uigur Bilingual Fragment from the Arat Collection. 新疆吐魯番學研究院（編）『語言背後的歷史：西域古典語言學高峰論壇論文集』上海古籍出版社，pp. 115–127.

MKT =『蒙漢詞典』内蒙古大學出版社，1999.

森安 孝夫 1980:「ウイグルと敦煌」榎一雄（編）『講座敦煌２ 敦煌の歴史』大東出版社，pp. 297–338.

森安 孝夫 1985a:「チベット文字で書かれたウィグル文佛教教理問答（P. t. 1292）の研究」『大阪大學文學部紀要』25, pp. 1–85, +1 pl.

森安 孝夫 1985b:「ウイグル語文献」山口瑞鳳（編）『講座敦煌６ 敦煌胡語文献』大東出版社，pp. 1–98.

森安 孝夫 1987:「敦煌と西ウイグル王國」『東方學』74, pp. 58–74.

森安 孝夫 1988:「敦煌出土元代ウイグル文書中のキンサイ緞子」『榎博士頌壽記念東洋史論叢』汲古書院，pp. 417–441.

森安 孝夫 1990:「ウイグル文書劄記（その二）」『内陸アジア言語の研究』5 (1989), pp. 69–89.

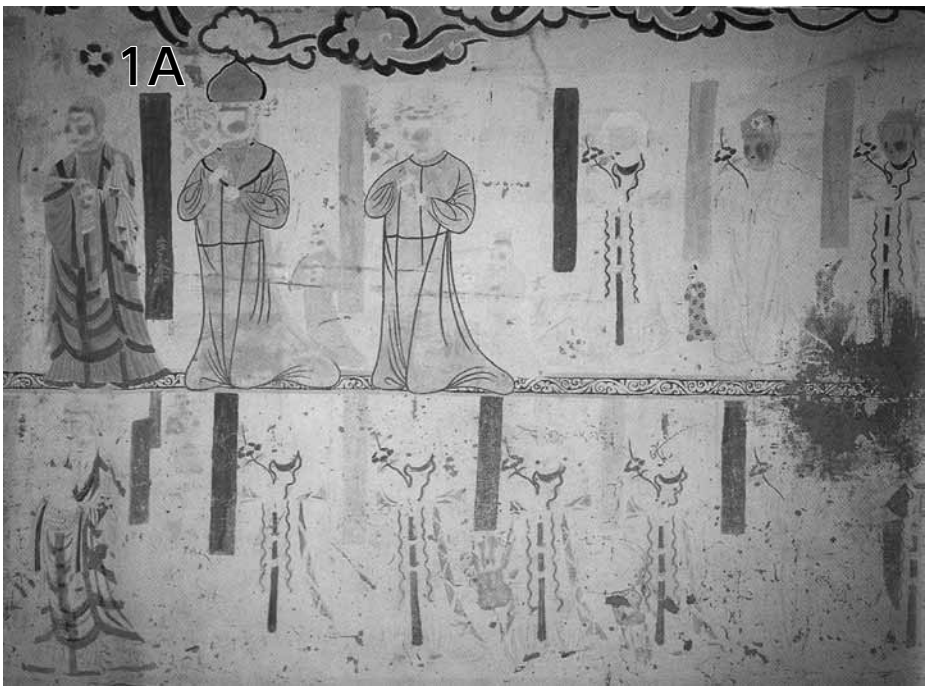
論文37

森安 孝夫 1991:『ウイグル=マニ教史の研究』(『大阪大學文學部紀要』31/32)。
森安 孝夫 2000:「沙州ウイグル集團と西ウイグル王國」『内陸アジア史研究』15, pp. 21–35.
Moriyasu Takao 2001: Uighur Buddhist Stake Inscriptions from Turfan. In: L. Bazin / P. Zieme (eds.), *De Dunhuang à Istanbul: Hommage à James Russell Hamilton,* Turnhout (Belgium), pp. 149–223.
森安 孝夫 2007:「西ウイグル佛教のクロノロジー」『佛教學研究』62/63, pp. 1–45.
森安 孝夫 2011a:「シルクロード東部出土古ウイグル手紙文書の書式(前編)」『大阪大學大學院文學研究科紀要』51, pp. 1–31.
森安 孝夫 2011b:「シルクロード東部出土古ウイグル文書の書式(後編)」森安孝夫(編)『ソグドからウイグルへ』汲古書院, pp. 335–425.
森安 孝夫 2011c:「2006年度内モンゴル 寧夏 陝西 甘肅調査行動記錄」森安孝夫(編)『ソグドからウイグルへ』汲古書院, pp. 474–531.
MOTH = James Hamilton, *Manuscrits ouïgours du IX^e^-X^e^ siècle de Touen-houang*. Paris.
村上 正二 1951:「元朝秘史に現はれた"奄出"(ömčü)の意味について」『和田博士還暦記念東洋史論叢』講談社, pp. 703–716.
Mvy = 石濱裕美子・福田洋一『新訂飜譯名義大集(*A New Critical Edition of the Mahāvyutpatti*)』東洋文庫, 1989.
Raschmann, Simone-Christiane 2012: The Personal Name *Taŋut* as Seen from the Old Uighur Texts. In: Rossiskaja Akademija Nauk Institut Vostochnykh Rukopisej (ed.), *Tanguty v Czentral'noj Azii: Sbornik statej v chest' 80-letija professora E. I. Kychanova,* Moskva, pp. 305–312.
榮 新江 1996:『歸義軍史研究』上海古籍出版社。
Rong Xinjiang 榮 新江 2001: The Relationship of Dunhuang with the Uighur Kingdom in Turfan in the Tenth Century. In: L. Bazin / P. Zieme (eds.), *De Dunhuang à Istanbul: Hommage à James Russell Hamilton*, Turnhout (Belgium), pp. 275–298.
Russell-Smith, Lilla 2005: *Uygur Patronage in Dunhuang*. Leiden / Boston.
庄垣内 正弘 1974:「ウイグル語寫本・大英博物館藏 Or. 8212 (109) について」『東洋學報』56–1, pp. 044–057.
庄垣内 正弘 1976:「ウイグル語寫本・大英博物館藏 Or. 8212 (108) について」『東洋學報』57–1/2, pp. 017–035.
庄垣内 正弘 1982:『ウイグル語・ウイグル語文獻の研究 Ⅰ』神戸市外國語大學外國學研究所。
庄垣内 正弘 1985:『ウイグル語・ウイグル語文獻の研究 Ⅱ』神戸市外國語大學外國學研究所(1984)。
庄垣内 正弘 2003:『ロシア所藏ウイグル語文獻の研究』京都大學大學院文學研究科。
薩仁高娃(Sarangowa) 2006:「伯希和洞窟筆記所見少數民族文字題記」敦煌研究院(編)『2004年石窟研究國際學術會議論文集』下冊, 上海古籍出版社, pp. 774–791.
杉山 正明 1982:「豳王チュベイとその系譜」『史林』65–1.
杉山 正明 1983:「ふたつのチャガタイ家」小野和子(編)『明清時代の政治と社會』京都大學人文科學研究所。
杉山 正明 2004:『モンゴル帝國と大元ウルス』京都大學學術出版會。
SUK = 山田信夫『ウイグル文契約文書集成(*Sammlung uigurischer Kontrakte*)』全3巻, 小田壽典・P. Zieme・梅村 坦・森安孝夫(編), 大阪大學出版會, 1993.
高橋 文治(編) 2007:『烏臺筆補の研究』汲古書院。
TMEN = Gerhard Doerfer, *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen*, I-IV. Wiesbaden, 1963–1975.
Tuguševa, Lilia Jusufžanovna 1971: Three Letters of Uighur Princes from the MS Collection of the Leningrad Section of the Institute of Oriental Studies. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 24–2, pp. 173–187.
梅村 坦・松井 太 2008:「ウイグル文字テュルク語文書」吉田順一・チメドドルジ(Čimeddorǰi)(編)『ハラホト出土モンゴル文書の研究』雄山閣, pp. 191–194.

論文37

謝 静 2008:「敦煌石窟中蒙古族供養人服飾研究」『敦煌研究』2008–5, pp. 20–24.
謝 静・謝生保 2007:「敦煌石窟中回鶻・西夏供養人服飾辨析」『敦煌研究』2007–4, pp. 80–85.
楊 富學 2011:「榆林窟回鶻文威武西寧王題記研究」『朔方論叢』1, pp. 96–103.
楊 富學・張 海娟 2012:「蒙古豳王家族與元代西北邊防」『中國邊疆史地研究』2012–2, pp. 21–37.
吉田 順一・チメドドルジ（編）2008:『ハラホト出土モンゴル文書の研究』雄山閣。
吉田 豊 1993:（書評）森安 1991.『史學雜誌』102–4, pp. 95–105.
吉田 豊 2007:「トルファン學研究所所藏のソグド語佛典と「菩薩」を意味するソグド語語彙の形式の來源について」『佛教學研究』62/63, pp. 46–87.
張 海娟・楊 富學 2011:「蒙古豳王家族與河西西域佛教」『敦煌學輯刊』2011–4, pp. 84–97.
竺 小恩 2012:「敦煌石窟中沙州回鶻時期的回鶻服飾」『浙江紡績服裝職業技術學院學報』2012–1, pp. 38–42.
Zieme, Peter 1978: Materialien zum uigruischen Onomasticon I. *Türk Dili Araştırmalar Yıllığı Belletin* 1977 [1978], pp. 71–84.
Zieme, Peter 1981: Uigurische Steuerbefreiungsurkunden für buddhistische Klöster. *Altorientalische Forschungen* 8, pp. 237–263.
Zieme, Peter 2012: Some Notes on the Ethnic Name *Taŋut* (*Tangut*) in Turkic Sources. In: Rossiskaja Akademija Nauk Institut Vostochnykh Rukopisej (ed.), *Tanguty v Czentral'noj Azii: Sbornik statej v chest' 80-letija professora E. I. Kychanova*, Moskva, pp. 461–468.
Zieme, Peter / Kara, György 1978: *Ein uigurisches Totenbuch: Nāropas Lehre in uigurischer Übersetzung*. Budapest.

附記　本稿は科學研究費（基盤研究（A）・基盤研究（C））および平成23年度三菱財團人文科學研究助成「敦煌石窟の供養人像と諸言語銘文の歷史學・文獻學的總合研究」による研究成果の一部である。敦煌諸石窟の諸言語銘文の調査研究を許可され，種々の便宜を圖られた中國莫高窟敦煌研究院に，この場を借りて謝意を表したい。また，現地調査において様々な局面でご支援を下さった，白玉冬（内蒙古大學）・坂尻彰宏（大阪大學）・荒川愼太郎（東京外國語大學）・佐藤貴保（新潟大學）・岩尾一史（神戸市外國語大學）・赤木崇敏（大阪大學）の各氏にも深謝する。なお，本稿の内容の一部は，2012年11月に北京・中央民族大學で開催された「西域・中亞語文學國際學術研討會」で報告しており，おって中國語でも刊行される予定である。



【圖版1–1】楡林窟第39窟・前室甬道北壁，ウイグル女性供養人像
（段文傑（編）『中國敦煌壁畫全集10・敦煌西夏元』天津人民美術出版社，1996，圖12）



【圖版1–2】楡林窟第39窟・前室甬道南壁，ウイグル男性供養人像
（段文傑（編）『中國敦煌壁畫全集10・敦煌西夏元』天津人民美術出版社，1996，圖10）

論文37



162　第332窟　甬道南壁西側　供養者　元

【圖版2–1】莫高窟第332窟・甬道南壁，モンゴル装束男性供養人像
（敦煌文物研究所（編）『中國石窟敦煌莫高窟』第５巻，平凡社，1982，圖162）



161　第332窟　甬道北壁西側　女子供養者　元

【圖版2–2】莫高窟第332窟・甬道北壁，モンゴル装束女性供養人像
（敦煌文物研究所（編）『中國石窟敦煌莫高窟』第５巻，平凡社，1982，圖161）

論文37



【圖版3】莫高窟第61窟・甬道南壁，供養比丘尼像
（段文傑（編）『中國敦煌壁畫全集10・敦煌西夏元』天津人民美術出版社，1996，圖183）

論文37

Studies in the Humanities

CULTURAL SCIENCES

Number 30

KIMURA Junji ..... The origin of passion —the meaning of Izanami myth in "Kojiki" 1

KIMURA Norimi ..... Right Dislocation and Discourse Function 1

HORI Tomohiro ..... Frederick Douglass and Josiah Henson: A Study of the Representation of Defiant Slaves in Mid-Nineteenth Century American Culture 15

Dai MATSUI ..... Notes on the Old Uigur Wall Inscriptions in the Dunhuang Caves 29

LI LIANG ..... Maekawa Kunio and Modernism Architecture 51

Faculty of Humanities
Hirosaki University
Hirosaki, Japan

ISSN 1344-6061

論文37